

*庭師?世界を歩く<チロル編>

今回は、2013年7月8日～7月19日に訪れたチロル地方の様子を紹介します。緑友会 SNS に投稿した内容を再編集したものです。

主なコースはミラノ(イタリア)～レイティッシュ鉄道(ベルニナ線)でサンモリッツ(スイス)～ドロミテ溪谷(イタリア)～インスブルック(オーストリア)です。

*第1日目(7月8日)

成田空港近くのホテルで前泊。午前の便でヨーロッパへ。アムステルダムで乗換へミラノに夕刻到着。バスで2時間ほどのイタリア北部の保養地、コモへ移動。21:00 頃着。宿泊。日本との時差は-8 時間。時間計算では10 時間ですが・・・。実際は18 時間。

*第2日目(7月9日)



この湖、ローマ帝国の皇帝ユリウス・カエサルが保養のために訪れたと言われています。現代でもヨーロッパきっての避暑地として知られ、湖畔にはヨーロッパの各王室や富豪等が建てた豪華な別荘が立ち並んでいます。このコモ湖の南半分をチャーター船でクルーズ。湖岸の街、ヴァレンナとベラージオで下船、散策。

途中、こんな風景を・・・。立派な邸宅の見事な刈込。高さ 10m を超えるのでは?と思われるコニファー。樹種は不明。最初に眼にしたときは、思わず、「綺麗」と声が出ました。さて、どうやって刈り込んだのでしょうか。ゴンドラ?足場を組んで?超長い刈込バリカンで?・・・、まさか登ってではないと思いますが・・・。敷地の中に大型クレーンが入れる道路も無いようです。裏手は崖なので・・・。湖岸近くでは、台船にクレーンを乗付けてとも考えられますが、奥まった方は・・・?皆さんならば、どうしますか?小生は考えあぐねています。

SNS 会員から①「見事です。ラクウショウのように自然形がこのような綺麗な形になるということはないのでしょうか。刈り込んだとしたらやはり足場でしょうか。」



会員から②「私の考えでは、何かの機械を使って整理されているとおもいます。その機械は何か、カニクレーンのようなもので、狭いところでも搬入できる現場で組み立て式の機械を使って剪定されていると思いますが・・・如何でしょうか。墓石を建てる時に石屋さんが使っています。幅1mくらい有れば移動できます。」

左の写真の邸宅は、007 カジノロワイヤルの舞台に使用された邸宅です。

たぶん、イブキ系統の樹木だと思います。樹幅は最大で 10m は超えるかと・・・ 。どうやって刈り込むか?あなたならどうしますか?足場を組みますか?比較的簡単な方法では、下部の近くは 15 尺程度の脚立を立てて・・・。届かないところは途中で体を出しますか?この場合天はどうしますか?航空写真で確認したところ、天には穴は開いていませんでした。クレーンを使う方法も選択肢。この邸宅も車が入れそうな場所ではなさそうです。富豪の邸宅なので、金にいとめはつけないと思いますが、安く、早く仕上げる方法を考えてください。



左の 3 枚は湖畔で見られたイタリア式庭園、またの呼び方は露段式庭園、テラス式庭園。その名通り、テラスを

数段の階段状に構成。左上(カルロット邸)と左下は、左右対称のシンメトリーが特徴のよく紹介されている構成。右は非対称な構成で、あまり目にしない構成ですが、綺麗です。フランスやイギリスとく

らべ高低差の大きい敷地を有効活用した結果でしょうか?前面が大きく開け、しかも高台に邸宅が配置されているので、窓からの眺望も素晴らしいのでないでしょうか?残念ながら、まだ一度も経験したことがありません。ぜひ、一度は眺望を楽しみたいものです。

キョウチクトウ (リンドウ目/キョウチクトウ科/キョウチクトウ属/常緑小高木)の花の種類



類って、たくさんあるんですね!ヴァレンナの村に下船。栈橋から上陸した時、八重咲のキョウチクトウが目に入りました。珍しいので、ついパチリ。

ヴァレンナの花=キョウチクトウ?



言っても過言ではないくらい、あちらこちら、キョウチクトウが咲いていました。普段、普段、高速道路沿いなどで良く見かけますが……。ああ、ここにもキョウチクトウが・・程度で、あまりジックリと観察したことはありませんでしたが……。あまりにも多いので、知らず知らずのうちに魅かれて……。よく見ると、結構、花の容姿が違っているのに気づきました。八重のもの、一重と八重の

中間、花弁が細いもの……。色も赤、白、桃、橙……。チョツとした発見?でした。

ただし、このキョウチクトウ……。経口毒性があり、野外活動の際に調理に用いたり、家畜が食べたりしないよう注意が必要です。枝を箸代わりに利用し、中毒した例があるそうです。その毒性は青酸カリよりも強いとも言われ、花、葉、根、果実すべての部分と、周辺の土壌にも毒性があるそうです。生木を燃した煙も毒。腐葉土にしても1年間は毒性が残るため、腐葉土にする際にも注意を要します。身近にある植物ですが、かなり、注意を払う必要のある植物のようです。



写真の家は、コモ湖畔の民家。こじんまりした住居と湖面側の傾斜面一面にアジサイが満開……。落ち着いた雰囲気を醸し出していました。



た。周囲はキョウチクトウの花が多いなか、ここだけは、なぜかアジサイでした。

下船後、コモの市内散策。コモの大聖堂です。



左の写真はコモのホテルの駐車場で見かけました。ピンオーク(ブナ目/ブナ科/コナラ属/落葉高木)。槍の穂先のような、独特の

形が珍しく、カメラに収めました。勿論、小生、目にするのは初めて。レッドオークの仲間だそうです。日本では公園などに栽植されているそうですが……。ピンは牧場の杭のことで、「材が杭に使われる」ことに由来しているそうです。京都府立植物園の温室の前に植栽されているそうで、街路樹としては少ないそうです。

*第3日目(7月10日)



今日は今回の楽しみの一つ、イタリアのティラノから世界遺産のレイティッシュ鉄道ベルニナ線に乗り、スイスのポントレジーナまでの車窓観光です。

途中のレストランに立ち寄った際、見つけました。セイヨウノコギリソウ(キク目/キク科/ノコギリソウ属/多年草)、とクサフジ(マメ目/マメ科/ソラマメ属/多年草)です。

さて、いよいよ乗車です。左はイタリア側の始発駅のティラノのホームに停車中の車両。中央はループ橋(日本では、某焼酎メーカーのコマーシャルにも……)ベルニナ線の見どころ。右はループ橋の一部。中央の線路からループ橋に入り、ちょうどループを一周したところで車窓から……。残念ながら、峠は小雨模様でした。



左・ポントレジーナので見かけた青いケシ(ケシ目/ケシ科/ケシ属/一年草)。ケシ=赤系

だけではありませんでした。たぶん、園芸種だと思いますが……。

よく見かける花でも、変わった色を眼にすると……。なんて表現すればよいのやら……。



中央・ライラック(モクセイ目/モクセイ科/ハシドシ属/落葉樹)、ホテルの窓から景色を眺めて……。ふと、窓下に目を移すと咲いていました。ライラック=札幌と連想されるように、北国の代表する花。札幌の木にもなっています。北国の花といっても、最近はお近所でもみられるようです。

ヨーロッパはもちろん、北アメリカでもとても人気で、非常にポピュラーな庭木として親しまれているそうです。北海道ではライラックが咲く頃に寒さが戻ってくると、「リラ冷え」と呼ぶほど生活と関わりが深い花木なのです。ちなみに、リラとはフランス語に由来。

右・ゼンテイカ(ユリ目/ユリ科/ワスレグサ属/多年草)。

*第4日目(7月11日)



今日は南スイスのオーバーエンガディン地方へ出かけます。朝から快晴。早朝のポントレジーナの街。もともと静かな町ですが……。早朝は一層……。昨日のお祭りの賑わいが嘘のようです。途中、マローヤに立ち寄りました。マローヤはアルプスを題材に数多くの作品を残した画家、ジョヴァンニ・セガンティーニが晩年過ごした村として知られ、村にはセガンティーニのアトリエがありました。お墓もあるそうです。周辺



の情景はセガンティーニの作品の中にも残されているそうです。湖はダセグル湖。ここで休憩タイム。

ヴィコソプラナーノと言う村を訪れた際、見つけました。



なんと、濃い紫？
青味のかかった黒
い花・・・？ペチュニ
ア(ナス目/ナス科/
ツクバネアサガオ
属/草本の総称)で
す。明るい色の多い

中にこんな色も……。窓辺に置かれたプランターに咲いて
いました。左はヴィコソプレーノでの一枚。

次いでソーリオ村を訪れました。マローや峠からイタリ
アのキアヴェンナまで約 1500m の標高差を下りながらのび
るフレガリア谷の奥。少し高台にある、かわいい村は、セガ



ンティーニやヘッセ、リル
ケなどが愛した隠れ里だそうです。険しい山々と緑あざやかな

牧草地の間
に石の屋根
と煙突が特
徴的な家々
が並ぶ小さ
な村は歩い
て約 10 分
で周れるほど

コンパクトな村。



ソーリオからカスターセニヤの間にはヨーロ
ッパ最大級の栗林があり“カッシーネ Cascine”
という小屋で栗を乾燥・薫製にして保存する伝
統が残っているそうです。写真はソーリオから
の眺めと村外れから見たオーリオ村。

左はソーリオ村で見つけたセイヨウニワトコ
(マツムシソウ目/スイカズラ科/ニワトコ属/落

葉低木)。遠目に見た感じではナナカマドの花に似ていました。よくみると、ナナカマドとは違
う？葉などは、ナナカマドと似ても似つかぬものでした。なんだろうとガイドさんに尋ねると
「ニワトコ」との返事。秋に、ヨーロッパの物は果実が黒く熟して食用に……。八重咲きや葉
に模様が入る斑入りなど、多くの園芸品種が知られているそうです。葉、枝、根にいたるまで優
れた薬効を持ち、古代ローマ時代から民間薬として普及し、その優れた薬効と汎用『歯痛から
疫病まで』といわれたそうです。



帰路、サンモリッツにあるセガンティーニ美術館に立ち寄りました。非常に小さな美術館で、セガンティーニの最後の作品で代表作となった三部作：生成(生)、存在(自然)、消滅(死)を中心に展示されていました。

写真は美術館前からの風景。サンモリッツ湖とピッツ・ラングラート(3262m・右手奥のピーク)。



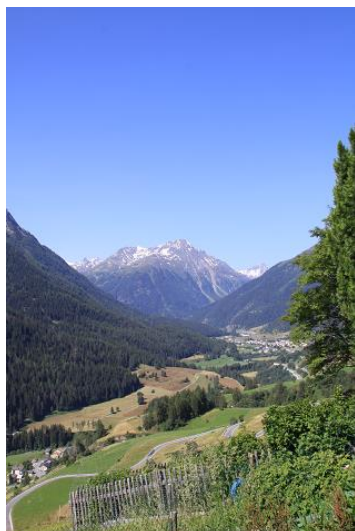
ポントレジーナへの途中にあるムラーユ展望台(2456m)に上がりました。歩いて・・・ではなく、ケーブルカーで・・・展望台からはサンモリッツ



ツをはじめ、すばらしい周囲の山々の景観が楽しめました。そのほとんどが 3000m 以上。左はムラーユ展望台から見た最高峰のピッツ・ベルニナ(4049m) 写真の植物はゲンチアナ・プンクタタ(リンドウ目/リンドウ科/リンドウ属/多年草)、サンモリッツで見つけました。高山植物の仲間です。花の色と葉の色が同系。一見、草?でもれっきとした花です。

*第5日目(7月12日)

今日は、スイスのウンターエンガディン地方を經由して、ドロミテ渓谷入口のイタリアの街、ヴォルツアーノへ・・・。



写真は、グアルダ村からピッツ・アルプ方面の眺めと、村に入る道にこじんまりと群れたサングイソルバ・オフィキナリス(バラ目/バラ科/ワレモコウ属)。

中央の写真はスイスとイタリアの国境に近いオフエン峠での一枚です。



スプーンの写真ですが、ミュスタイアのレストランで見つけました。たまたま、壁に飾られていたので、撮ってきました。左の2本は、喫茶用とスープ用、先の尖ったものは果物用だと思いますが……。よく似てはいるものの、形や長さが微妙に違います。現代で使われている形のアイスクリームなどのデザート用がないので、かなり、古い

時代のものだろうと思いますが……。

スプーンを使う食文化の中で生活されている人たちは、さぞ、大変?…。日常はあまり使い分け……。?をしていたのではなく、たぶん、同じスプーンを使っていたのでは?と……。それにしても、これだけの種類があるということは、晩餐会など、特殊行事などでは使われていたのでしょうか?使う人は出された順番に使えば事足りますが、出す側は間違うと大変……。まとめて出されたらどうします。ま、最悪、並べられた外側から、



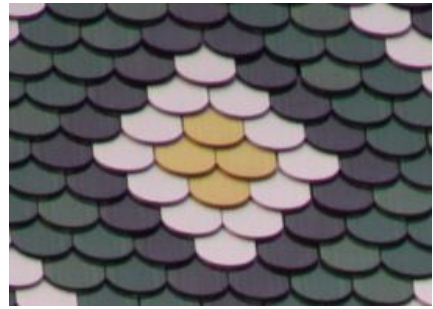
一皿毎に使えばなんとかかなると思いますが……。

ミュスタイアはイタリアとの国境の街。ここには世界遺産の聖ヨハネ・ベネディクト修道院があります。女性の修道院です。写真は修道院の外観と修道院の敷地内にある墓地から見た修道院。それから修道院から眺望したミュスタイアの村。



修道院を後にすると、すぐにイタリア。イタリアへ再入国しても検問所も無く……。

教会はヴォルツアーノの大聖堂。屋根のモザイク模様が美しいので一枚。



右下はロニケラ・カプリフォリウム(マツムシソウ目/スイカヅラ科/スイカヅラ属/常緑つる性木本)、ヴォルツァーノの市内で見つけました。花だけ観ると一見、ネリネ(ヒガンバナ科)の仲間？

花から下の軸は全く異なります。どちらかと言えば樹木。それもそのはず、スイカヅラ科の植物ですから・・・何とも言えない派手さの中に清楚さを秘めた感じがしました。房状に咲いている花はモクゲンジ(ムクロ



ジ目/ムクロジ科/モクゲンジ属/落葉高木)。メインストリートに街路樹として植えられていました。風船のような実？が珍しく、この木なん



の木？と思いつつ、パッチリ。一見、ハリエンジュのような葉と花。似ているようで・・・。帰国後、調べてみるとモクゲンジとの結論。クロモジの仲間だそうです。風船様の物体？は実でした。木の葉のようすがセンダンという植物の葉に似ているので「センダン葉菩提樹(ぼだいじゅ)」と呼ばれることもあるそうです。本来の菩提樹とは全く別の植物。

右下はセイヨウシナノキ(アオイ目/シナノキ科/シナノキ属/落葉性高木)。市内散策中に見かけました。教会の前に一本だけ、植えら

れていました。あまり見かけない樹なので・・・。後で調べたところ、セイヨウボダイジュ。キリスト教系の教会に仏教系の名前の樹木・・・。なんとなく、



不思議な気持ちになりました。セイヨウボダイジュより、リンデンバウムの方が良くしられているのでは・・・？

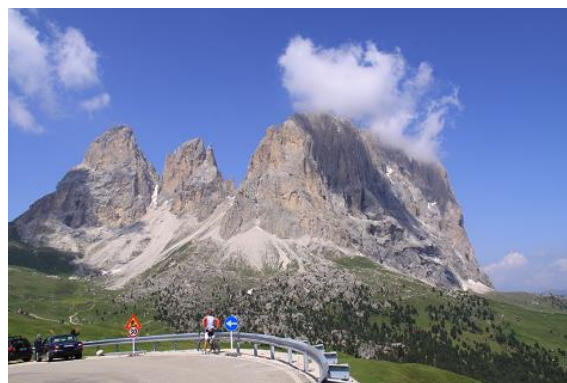
***第六日目(7月13日)**



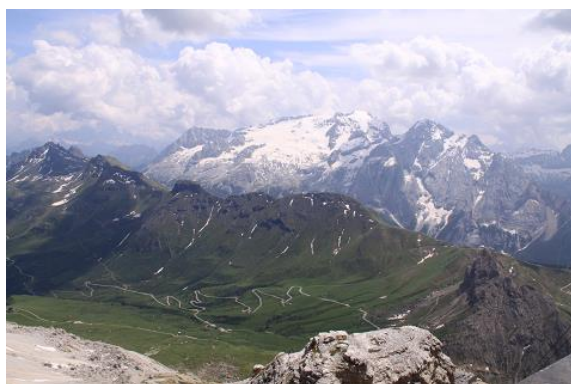
今回の楽しみの一つ、ドロミテ渓谷の探勝です。ヨーロッパアルプス山脈の南側の分嶺でイタリアの北東部に位置するのがドロミテ山塊(ドロミテ・アルプス)です。本街道に入って最初に訪れたのはカレッツァ湖。カレッツァ湖は、神秘的な深緑の湖水と、その湖畔の濃緑の針葉樹林、その後ろに独特の灰色のドロマイト(苦灰石)で出来た針のような山々ラテマール(Latemar 2842m)、さらにその山姿が湖に写って、とても神秘的な美しい湖でした。カレッツァ湖を後に、当初は予定になかったセッラ峠へ・・・少し、時間があるので、と・・・。

急遽のトッピンング。セッラ峠

(2240m)、ドロミテで最も高い峠だとか・・・。その峠にある3つの岩山から構成されているのがサッソルンゴ(主峰が3179m、左に2998m, 3114m)。



本街道、次は、ポルドイ峠(2239m)からロープウェイで登るサッソ・ポルドイ(2950m)のからの展望です。すぐ近くにあるセッラ峠とは標高差わずか1m。誤差の範囲では?展望台を出ると広い雪原でした。ドロミテのテラスと呼ば



れているのが領けました。

左は展望台からみたドロミテの最高峰マルモダーラ

(3343m)、とロープウェイから見たピッツ・グーダ(右・2132m)。サッソルンゴも見渡せました。360°の景観が楽しめました。



本街道の山岳地帯を抜ける最後の峠、ファルツァーレゴ峠(2447m)の様子。今日の終着地コルティナダンベッツォは写真の奥になります。



右はファルツ
アーレゴ峠で見
かけたゲラニュ
ウム・シルバティ
ウム(フウロソウ
目/フウロソウ科
/フウロソウ属/
多年草)



ポコロ展望台
からポーマガニ
ヨン(2450m・左)とクリスタッロ(3210m・右)
を背景にコルティナダンベッツォの遠景。ポ
コロ展望台を下ると今日の目的地、コルティ
ナダンベッツォ。

写真はポコロ展望台でみられたカラマツ
(マツ目/マツ科/カラマツ属/落葉性高木。同



行者の誰かが、「カラマツがある」との声
に、見上げてみました。小生、カラマツを
実際に目にするのは初めて。「これがカラ
マツなんだ」と……。普段、見かける松の
仲間とはかなり異なる感覚でしばらく見
ていました。

後で判ったことですが、日本原産の日
本固有種と
か……。

和名は葉の付いた様子が唐文様に似ているとの意味。落葉す
るので落葉松、富士山に生育するので

フジマツ別名もある。秋には黄葉し、春は新緑が美しい。

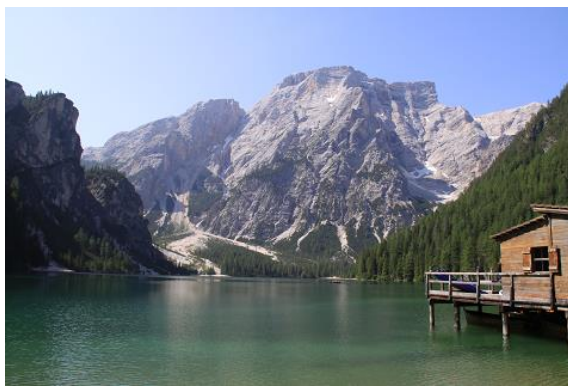
*第7日目(7月14日)

今日も快晴でした。写真はコルティナダンベッツォから
トファアーネス山群(左からローツェス 3225m、メッツォ 3224m、
デントロ 3237m)を望む





ホテルに到着。夕暮れまでに時間があつたので、市内散策にとホテルを出発。隣のホテルの軒下に小さな星を鑲めたような白い花が咲いていました。白くて可憐な花につい、一枚。帰国後、調べた結果、ペンタス(アカネ目/アカネ科/ペンタス属/多年草・常緑低木)。北イタリアの山中の街に咲いていたので、寒冷地の花とばかり思っていました、原産地はアフリカ。しかも熱帯地方。路地植えなので、この街、結構、暖かいのかとも思いきや、ネットによれば、ここ 2 週間は最高気温 5℃から最低気温-3℃。やはり、寒い地方でした。属名の「ペンタス(Pentas)」はギリ



シャ語の『pente「ペンテ(5)」』の意で、花びらが 5 弁の星形をしていることにちなみます。和名はサンタンカ「山丹花」(4 弁花で常緑低木)に似ている草花であるところから「クササンタンカ(草山丹花)」と呼ばれているそうです。

ドロミテ溪谷の北東部に位置するブライエス湖。一周のハイキングコースがあります。サッサと歩けば一時間程だそう



うです。

ドロミテには沢山の湖がありますが、ベスト 3 を選ぶとすればミズリーナ湖、ブライエス湖、カレツァ湖だそうです。ブライエス湖はクロード・

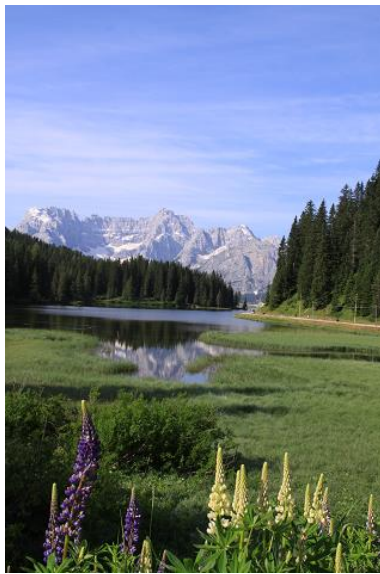
デル・ベッコ(2810m)を映す美しい湖です。駐車場の付近には多くの人たちがきていましたが、湖周囲の散策路に入ると、静かな雰囲気味わえました。その散策路で見かけたホルミヌム・ピレナ

イクム(シソ目/シソ科/ホルミヌム属/多年草)です。同じくドイツトウヒ(マツ目/マツ科/トウヒ属/常緑針葉高木)。正式にはオウシュウトウヒ。ですが、ドイツでよく見られる木で、有名なシュヴァルツヴァルト(黒い森)の多くの木がドイツトウヒだそうです。

*第 8 日目(7 月 15 日)



今日はイタリアからオーストリアへ入ります。途中、ドロミテ溪谷の東部に位置するミズリーナ湖とトレチーメ (2999m) を訪れました。ミズリーナ湖には湖岸を 40 分程度で一周できる散策路がありました。写真はソラピス山群 (3205m) を背景にしたミズリーナ湖。湖の周辺の空気は呼吸器疾患に苦



しむ人たちに適しているようで、湖の近辺にはイタリアでただひとつの気管支喘息の子供のためのセンターがあるそうです。

トレチーメ (右) は 3 つの岩山からなっています。その山裾に



沿ってハイキングコースがあり、ハイカーを含め、多くの観光客が訪れる景勝地だそうです。

左からクレマチス・アルピナ (キンポウゲ目/キンポウゲ科/センニンソウ属/蔓性多年草)、アルペンローゼ (ツツジ目/ツツジ科/ツツジ属/常緑性低木)、ゲンティアナ・ベルナ (リンドウ目/リンドウ科/リンドウ属/矮小性多年草)。クレマチ



ス・アルピナ・・・ミズリーナ湖の湖畔を一周散策中に見かけました。樹木の片隅に、ヒツソリと咲いていました。クレマチス・・・日本では比較的大きな花をさかせますが・・・ここでは日本で見かける花の 1/2 ほど・・・可憐でした。クレマチスの花弁状の萼片の数・・・

アルピナは4枚、ですが、日本で多くみられるクレマチスは・・・?5~6枚、もっと多い品種も見かけます。4枚は日本では珍しいのでは・・・?アルペンローゼ・・・。この花もミズリーナ湖散策中に見かけました。よく耳にする名前ですが、実際に目にしたのは初めて。スイスを代表する高山植物の一つです。シーズンも終りに近づいているのか、今一つ、高山植物特有の華麗さが伝わってきませんでした。葉の裏に茶色の斑点があり、水分・養分不足?と感じられたからかもしれません。同行中のご婦人に教えていただきました。

ゲンティアナ・ベルナ・・・ドロミテ渓谷のトレチーメ(2999m)を散策中に見つけました。岩場の陽当りの中に咲いていました。鮮やかで目に着きやすい花のようです。陽当りの中なので、特に鮮やかに感じたのかもしれません。

アルペンローゼとゲンティアナ・ベルナはエーデルワイスとともにアルプスの三大名花になっています。

「Alpenrose」はドイツ語で、アルプスのバラの意味。英語では「snow-rose」(雪のバラ)の他に「rusty-leaved alpenrose」(錆びた葉のアルペンローゼ)とも呼ばれています。アルプス山脈、ピレネー山脈(フランスとスペイン国境)、ジュラ山脈(スイス)およびアペニン山脈(イタリア)北部の高山帯に育っているそうです。名前から受ける感じでバラの仲間と思われやすいのですが、実物を見るとすぐに石楠花に近い躑躅科の植物。花は石楠花より小ぶりでやや肉厚の感じ。スイスでは森林限界に近い森の中や、もっと上のアルプの岩かげなどまで広く分布して



いるので、あちこちで見ることが出来るそうです。

オーストリアに入って最初に宿泊したハイリゲンブルト。

チロルアルプスの最高峰のグロースグロックナー(3797m)背景にしたヴィエンツ教会。この教会にはイエス・キリストの聖血が保管され

ているそうです。15世紀に建てられたゴシック様式のかわいらしい教会です。ヴィエンツ教会は、10世紀の頃、ビザンチン帝国(東ローマ帝国)のブリッキウスという官吏が、イ



エス・キリストの聖なる血を運んでいてこの地で行き倒れ、彼と聖なる血のために建立されたという伝説を持つ教会。

いずれもハイリゲンブルトのホテルのベランダから撮りました。一見、農家の



ようですが……。低い生垣と芝庭に囲まれています。山間部の多雪地方ならではの構成でしょうか?それでも、ベランダには花が飾られていました。右は多分、ホテルだと思いますが……。

宿泊したホテル前のプランターにはペゴニアが満開でした。ペゴニア……。寒さに弱い植物



だと思っていたのですが……。こんなところで見かけました。ハイリゲンブルートは、標高1200m。周囲は3000m級の

山に囲まれた地域。夏場の気温は 25℃ぐらいまでは上がるそうですが……。そんなに多くは無いと思います。しかも良く見かける小さな花を多く咲かせるタイプ(木立性・四季咲・根茎性)ではなく、豪華な八重咲。球根ペゴニア、エラチオールペゴニアと呼ばれている種。アンデス山系に分布する数種の球根性ペゴニアを掛け合わせてつくられた品種が球根ペゴニアと呼ばれているそうです。冬場の管理が大変では……。?勿論、屋外は氷点下。

ヨーロッパ……。窓の外に、明るい色の花をハンギングしている光景を思い浮かべる方も多いかと思いますが、ハンギングされている花は、ゼラニウムやペゴニアが多いようです。年間を通じて咲かせることができるので重宝なのかも……。でも、花ガラ摘みが大変……。?。壁全面の花園……。綺麗です。

*第9日目(7月16日)

ハイリゲンブルートを出発してグロースグロックナー山岳道路を利用して山越えです。今



夜は最終訪問地インスブルック。

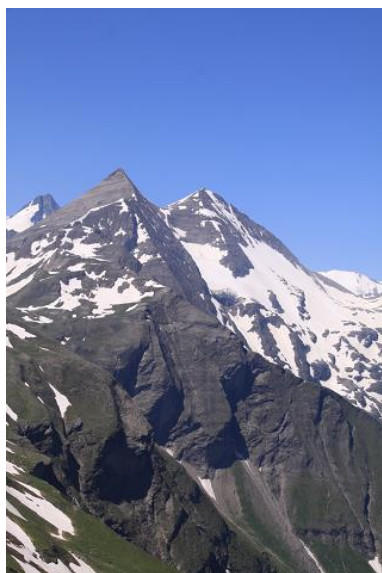
です。旅も終盤を迎えています。山岳道路をフランツ・ヨーゼフ・ヘーエ……。ここではグロースグロックナーとパステルツェ氷河を真近くに臨むことができました。手前の黒っぽい部分がパステルツェ氷河、中央奥にはヨハネスベルク(3460m)が……。1856年、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世は皇妃エリザベート(シィ)とともに、この山の氷河を見物に訪れた

そうです。ハイリゲンブルートから4時間かけて、皇帝夫妻はひとつの鞍部に達し、ここが「フランツ・ヨーゼフ・ヘーエ」と呼ばれるようになったそうです。皇帝はこの場所に2時間以

上とどまり、オーストリア最大の長さ 9.4 キロのパステルツェ氷河の眺望をはじめ、グロースグロックナーの偉容に深い感銘を受けたと伝えられています。

それにしても、当時は整備された道路もなく、多分、登山道?程度だったのでは?

右手の道路の上にはハイキングコースがあり、フランツ・ヨーゼフス・ヘーエで見かけたギルシウス・スピノシシウム(キク目/キク科/アザミ属/多年草)です。サンモリッツで見かけた



ゲンチアナ・プンクタタと同じく高山植物の仲間。やはり、花と葉が同系色です。



どちらも目立たない色合いなので、

最少はほとんど見落としていましたが・・・何度か見かけるうちに、これ、何だろう・・・。と思い、よく見ると花でした。もちろん、初接見。帰国後、初めて名前を知りました。山岳道路のフィッシャーテール付近から左奥グロースグロックナー(3798m)、中央サンネンウェラック(3261m)、右フィッシャーカールコフ(3331m)。

*第10日目(7月17日)

インスブルックの旧市街、左はゴールドナー・アドラー。1390 年創業のホテル。1F はレストラン。観光名所だそうです。中央はヘルツォ・フリードリヒ通り。右は人形の形をしたモニュメント?ヨーロッパではよく見かけるスタイルです。目が時々、アチラを観たり・・・。手を振ると微笑んできます。中身は人間、長い間ジッとしています。結構、疲れる商いではないでしょうか?大道芸人の仲間です。



インスブルックの背後にあるハーフェレーカーからの眺めです。ちょうど、パラセーリングのテイクオフを見ることができました。



インスブルックの宮廷教会の中庭です。結構、シンプルな構成でした。東西南北に通路。その

中央に塔(モニュメント)。通路の外側は芝と質素な樹木。派手さは無く、落ち着いた構成でした。どの教会も、基本はこのような構成のようです。全体の広さや、中央のモニュメントに至る通路構成などは異なっているようですが・・・。

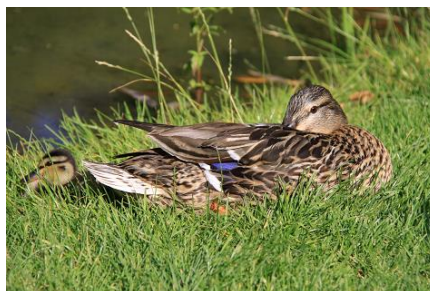


に、教会の祭壇は東西南北のどの方位でしょうか？東側が基本。ほとんどが東側に

設けられています。まれに、他方位の教会もあるそうです。理由はわかりません。

インスブルックの旧市街にある公園です。「王宮庭園」だそうです。ちょうど、王宮の前にあり、かつては王宮の一部だったのか？

花壇あり、池あり、ベンチありの、一言でいえば森林公園。市民の方たちが、木陰の芝に座り込んだり、ベンチに座って談笑したり、ノンビリとした雰囲気でした。庭園と冠しているので、幾何学的なフランス風の庭園を頭に描いていたため、チョッと、拍子抜け



け・・・。



左はキササゲ(シソ目/ノウゼンカズラ科/キササゲ属/落葉高木)。一見、ランの仲間?かと思いきや、かなりな大きさになる樹木。通路右手に茂っている樹木がそうです。樹木全体が花で覆われ、見事でした。左はアチスルベ(ユキノシタ目/ユキノシタ科/チダケサシ属/多年草)、王宮庭園を散策中に見かけました。空に向かって勢いよく伸びた一塊の花穂に感激?。群生している姿は、遠くから

でも目を引き、引き寄せられました。

近年のガーデニングブームとともに人気品種だそうで、ボーダーガーデンでよく用いられているそうです。普通、園芸でアチスルベと呼ばれるのはドイツのゲオルク・アレンドスが育成し 1908 年に発表した *Astilbe ×arendsii* だそうです。

洋風・和風の庭どちらにもよく合う花ですが、自然風にまとめます 梅雨前後にかけて風情のある花を咲かせます。右はゼンテイカ(ユリ目/ユリ科/ワス



レグサ属/多年草)。



今回の旅も、今日が実質最終日。明日は早朝、ミュンヘンに移動。アムステルダム乗継で成田へ。帰国は 7 月 19 日の朝です。

(完)